

Newsletter

December 2021

<http://www.aack.info>

目次

AACK のこれから		第 48 回雲南懇話会の講演概要	
幸島司郎	1	山岸久雄	13
三高山岳部報告第一号について		大雪の高田、その後	
斎藤清明	2	横山宏太郎	15
ニホンライチョウの保護事業		事務局便り	18
牛田一成	5	会員動向	18
チョゴリザ登山隊のカメラマン・		編集後記	18
潮田三代治氏を悼む			
芳賀孝郎	9		

AACK のこれから

幸島司郎

今回、AACK のこれからの活動について、ニュースレターに何か書いて欲しいと編集長の横山コータローさんから要請がありました。大きな転機にある組織の新任会長に対する至極当然な要請だと思います。私も、昨年2月に会長をおおせつかって以来、AACK がこれから何をすべきか、私なりに考え続けてきました。しかし残念ながら、就任のご挨拶に書かせていただいた以上のことは、まだあまり書けそうにありません。そこで、前回書いたことと重複が多くて大変申し訳ありませんが、AACK のこれからの活動について、会員の皆さんと考え、議論するためのたたき台として、私の現状認識と現在考えている大まかな方針について再度書かせていただきます。

まず現状認識です。ご存知のように、AACK はそもそもヒマラヤの未踏峰に初登頂することを目的に結成され、これまで数多くの学術登山隊を派遣してきた輝かしい歴史を持っています。ところが今では、目指すべき未踏の地や未登の高峰はほとんどなくなり、ヒマラヤ登山や

海外での学術調査も特別なことではなくなりましました。なにしろ世界最高峰のエベレストにさえ、お金さえ出せば登らせてくれるサービスがあるほどです。またヒマラヤやパタゴニアでの学術調査も、かつては AACK の諸先輩をはじめとする登山技術をもった限られた研究者が遠征隊を組織して行っていました。現在では普通の研究者が文科省の科学研究費で行うのが当たり前の時代になりました。したがって、AACK が従来のような遠征隊を派遣する意味や必要性は、今やほとんどなくなったと私は考えています。

また、大学山岳部や探検部の危機的状況からもわかるように、登山や探検を志す若者も減っています。それに伴って会員の平均年齢も大きく上がり、年齢構成も高齢者に偏ってきました。前会長の松沢さんの努力により、会費の安い学生会員の制度を作ってから、京都大学山岳部に入部すると同時に AACK にも入会する部員が増えたため、若い新入会員が多少増えたものの、この傾向は止まっています。AACK 会員の

平均年齢の正確な集計はありませんが、本会会員の大部分が所属している笹ヶ峰会の2018年時点での平均年齢（古久保一徳永克男：チローさんによる集計）が68.1歳ですから、現時点では確実に70歳を超えているはずです。会員の大部分が後期高齢者になる日が目前に迫っています。

では、このように遠征隊を出さなくなり、新入会員も少なく、会員の高齢化が確実に進んでいるAACKは、単なる山屋の親睦団体として、会員の高齢化とともに自然消滅してゆくしかないのでしょうか。私は、「それも仕方がないか」と思う反面、そうだとすると、AACK会員がこれまで培ってきた経験や知識を生かして、消滅までの過程で、絶滅の危機にある「登山や探検、フィールドワーク」を志す若者を増やし、サポートするような活動を、できる限りやるべきであると考えています。「登山や探検、フィールドワーク」は、未知なるものに挑戦し、未踏

の学問領域を切り開くために有用な行為であり、その重要性を社会に伝え広めることが、一般社団法人であるAACKの重要な社会貢献だと信じているからです。

そのために何をすべきか、私自身、まだ目新しい具体的アイデアがあるわけではありません。しかし少なくとも、(1) 昨年度行った梅棹忠夫生誕百年記念事業やそれに連動したオンライン講演会など、AACKやAACK会員の活動を紹介するような事業や、(2) これまでの遠征記録や会員の持つ貴重な資料のアーカイブ化、(3) 雲南懇話会など、会員による社会活動の支援、(4) 京都大学山岳部や探検部など、「登山や探検、フィールドワーク」を志す学生との交流と支援、などの活動をできる限り強化し、進めてゆくつもりです。

AACKがこれから何をすべきか、今後も、会員の皆さまと考え続けたいと思いますので、ご意見やご提案をいただければ幸いです。

三高山岳部報告第一号について

斎藤清明

今回は「AACK会報第一号」にふれたので、今回は「三高山岳部報告第一号」についてです。これにも今西錦司さんが関係しています。

三高山岳部は、大正12(1923)年に、学校公認の自治組織「嶽水会」のひとつの部として発足した。ところで、その10年前から「三高山岳会」があった。日本山岳会の創立メンバー小島烏水の弟で三高野球部のエース小島栄が、野球部の仲間と呼びかけ、山本宣治（後に労農党から代議士になるが暗殺される）らが加わってできていたが、比良登山や夏休みの日本アルプス縦走といった山行がもっぱらで、同好会のようなものだった。

すでに中学生で「山城30山」登山をしていた今西、西堀栄三郎さんらは三高に入学後も自分たちでスキー登山をはじめ、アルピニズムに目覚めつつあった。そうして、桑原武夫、高橋健治、四手井綱彦、渡辺漸、佐島敬愛さんら三高二年生の同級生が、山岳部をつくろうと集った（今西、西堀は三高受験での浪人や入学後の留年で、中学で二年後輩の桑原らと同学年に

なった）。三高では前年度に校長排斥の学生ストなどあって学内は大騒ぎだったが、新学期とともに山岳部が活動をはじめた。

校門わきの用務員室をもらってルームとし、部員は放課後に詰めるようにつとめ、壁には部員名と一年の日付を記した表を張り出して山に行った日には印をつけるなど、山行に励んでいた（今西は卒業年の大正13年度は82日間でトップだった）。そうして、活動の「報告」が刊行されていく。

第一号はのちにふれることにして、さきに第二号から。表紙に「三高山岳部報告」「第二号」「大正13年6月」、裏表紙には「桑原武夫」とある（編集を担当したとおもわれる）。奥付はない。頁もふっていないが、ガリ版刷りで50頁。執筆者がそれぞれガリ切りをしたようで、各文章の字体が異なっている。本文は「武奈ヶ岳登山」（飯島）と「木曾御岳」（渡辺）。つづいて今西執筆の「グリセイデイグ」「加茂川水源略図を作るについて」、高橋訳「歩行について」、桑原訳「アルプス・スキー」など。1月の関温泉スキー練

三高山岳部オ1号



告報部岳山高三
號一第

圖地川股北源水川野吉

AAAC
 THE ACADEMIC ALPINE CLUB OF KYOTO
 京都大学学士山岳会
 国際登山探検文献センター
 蔵書

受入番号 02774

受入年月日 1923年3月26日

2774

習から6月までの部の活動を記録した「日誌」、末尾に「山岳部名簿」(現役部員は26名)がある。今西作成の「加茂川水源略図」を添付している。

第三号は大正14(1925)年2月28日発行。手作りの第二号とは面目を一新し、大阪の印刷会社の謄写印刷で、美濃和紙で252頁もある。奥付に編輯兼発行者三高山岳部理事と印刷者名を記し、(非売品)としている。口絵写真(飛騨笠が岳)があり、本文は「九州火山廻り」(山内)、「越中アルプス、ヒュウレルロスの記」(渡辺)、「北海道中央高地アラインゲーエンの断想」(高橋)、「大滝山、蝶ヶ岳、穂高岳」(多田)、「新雪の甲斐駒ヶ岳」(今西)。また「鈴鹿紀行」を特集し、今西が略図を書き、桑原の「鈴鹿の人々」など7編を掲載。他に今西や西堀、渡辺らのエッセイや桑原の短歌も。さらに桑原訳「雪崩と雪」が54頁分もある。最後に部の活動記録の関山スキー合宿日記、日誌(1924・6～1925・2)。桑原は編集後記に「立派なものでもないが一号二号とは比べ物に成らぬ。皆で協力して育てたのだと思うと嬉しい」と記す。

第四号は大正15年5月発行。第五号は昭和元年12月25日印刷、昭和2年1月1日発行で、謄写から活版印刷となり、奥付に実価1円50銭とある。関温泉朝日屋や登山スキー用品西岡一雄などの広告も載っている。二号と三号はA4サイズ大だったが、四号から四六判になり、以後はこのサイズで続いていく。

さて、第一号は冊子ではなく、地図なのです。「吉野川水源北股川地図」という、五万分の一縮尺で、B4判の大きさ。今西・西堀・佐島が北股川を遡行したのに基づいたもので、作成者の名前はないが今西が描いたとおもわれる(今西は第二号で加茂川水源略図を、第三号で鈴鹿の略図を書いているので)。吉野川の源流である奈良県の北股川とその支谷の名前が詳しく記されていて、今西たちの踏査ルートも破線で示され、池木屋山の直下まで至ったことが読み取れます。

この地図とともに、「吉野川水源概念図」も作成された。五万分の一図高見山・大台ヶ原・山上岳・吉野山や、『山岳』の「吉野川水源地付近略図」を参照したと記しており、吉野山から大峰山系、大台ヶ原山までの広い範囲の水系の略図になっている。「吉野川水源北股川地図」には「三高山岳部報告第一号」と記されている

が、こちらにはその記入はないものの、前者にはない「大正十二年十一月八日」の日付が入っている。これが、三高山岳部報告第一号の発行日になるとおもわれる。

この地図だけの三高山岳部報告第一号は、三高山岳部ルーム日誌に登場し、工楽英司「第三高等学校山岳部報告」(現代登山全集第一巻「日本の山と人」東京創元社1961)にも紹介されていた。そこで、私がAACK50年史『ヒマラヤへの道』(1988)や今西錦司初期山岳著作集『初登山』(1994)など執筆の際に、AACKの資料室や今西家で探したものの、見つけれなかった。もっとも、工楽さんが昭和2年に三高に入学したときにも、『報告』は第五号まで発行されていたが第一号は品切れ入手不能で、部室備付のものを見たかもしれないが記憶になくて「聞くところによると」と断って記述している。

じつは、今年になって『今西錦司と自然』という子ども向け伝記を依頼され、あらためて資料類を見直していると、見つかったというわけです。それには、三高山岳部報告第一号吉野川水源北股川地図と記して三高山岳部印もあり、さらにAACK国際登山探検文献センター蔵書印(受入番号2744)も。1973年に文献センターが設立された際に受け入れた三高山岳部資料類に含まれていたのにちがいません。

ところで、「三高山岳部報告第一号 吉野川水源北股川地図」には、谷筋が名前を付して克明に調べられているほか、山名が二つだけ記されている。北股川源頭の池ノ木屋山と右岸にある白鬚岳が(地図の原文のまま)。そうして、今西さんは池木屋山(1396m)には1957年に、白鬚岳(1378m)には82歳を越えた1985年11月3日に登頂します。三高山岳部報告第一号としての地図に白鬚岳を記してから62年後、今西さんの「1500山」目となったのです。

この「1500山」では、森本陸世(グロン)が今西さんの手をずっと引いてくれたのを思い出します。また、私も現役時代の1967年、五月山行として北股川を遡行して池木屋山に登ったのを覚えています。

第三高等学校は戦後の学制改革によって1950年3月末に消滅し、三高山岳部もなくなります。それでも、その27年間に、『報告』は第十五号(昭和18年5月発行)まで刊行され、

また『報告』の付録としての「時報」は三高山岳部がなくなるまで続いたようです。

2023年は三高山岳部100年になりますが、

「三高山岳部報告」は、京大山岳部『報告』にも連なっているとおもうのです。

ニホンライチョウの保護事業

牛田一成

笹ヶ峰会のメーリングリストでもお知らせしていたように、3年前から中央アルプスのライチョウ復活事業が進んでいます。ライチョウ保全に関する一般公開シンポジウムには、日本山岳会の自然保護委員会のメンバーが決まって参加されるなど、登山者の関心も高く、AACK会員の皆様にもお知らせする機会をと考えていたところ、横山宏太郎編集長から原稿依頼をいただきました。小職は、環境省のライチョウ保護増殖検討会委員および野生復帰検討WGの委員として、事業の実施に関与しています。また環境省の環境研究総合推進費を2期にわたり受託し、飼育下ニホンライチョウ野生復帰に必要な技術開発を行っています。本稿では、ライチョウ保護増殖事業の現時点での到達点とそれを支える技術開発の内容をお知らせします。

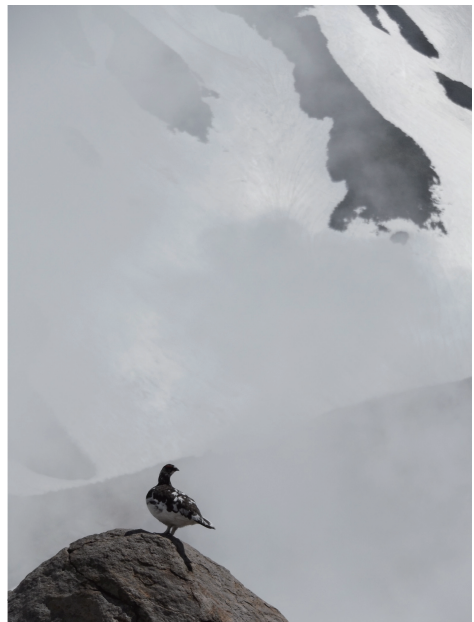
国のライチョウ保護増殖事業は、2012年に保護増殖事業計画が策定され、第一期が2015年から開始されました。縄張り（つがい形成期に1羽のオスが勢力範囲とする主としてハイマツの植生パッチ）の数から1980年代に約3,000羽と推測されていた繁殖可能成体数が、2000年代初頭には約1,700羽に減少したことをうけて、環境省が定めるレッドリストのランクがII類（絶滅の危険が増大）からIB類（近い将来における野生での絶滅の危険性が高い）にランクアップしたためです。日本固有の個体群を絶滅させてしまったトキやコウノトリのように回復不可能なところまで個体数を減少させないために、保護事業が早期に開始されました。

この事業の特徴は、生息域内における「ケージ保護法」と「捕食者対策」の導入に加えて、将来の野生復帰をめざした動物園における増殖事業、いわゆる生息域外保全の2本立てになっている点です。トキやコウノトリあるいはツシマヤマネコのように大型の専門施設を生息地につくるのではなく、随時の設置と撤去が可能な

小型ケージによる保護と各地の動物園のリソースを利用する戦略で、これまでの表徴種の保護政策とは一風変わった戦略が採用されています。ケージ保護法は、中村浩志信州大学名誉教授が発案、実装されている方法論です。ここでは概略を紹介します。詳しくは、成書（神の鳥ライチョウの生態と保全 楠田哲士編 緑書房2020）を参考にしてください。

ライチョウの生活

ライチョウは、5月の連休あたりに越冬地から繁殖地に移動してきます。5月の源治郎尾根上などでもオスが騒がしく縄張り争いをしていますが、ライチョウの生息地ではどこでも同じ光景がみられます。縄張りはハイマツのパッチが1単位となっていることが多いです。ほどなくして縄張りに1羽のメスが入り（2羽入るこ



地獄谷の噴煙の中、縄張りを見張るオス（2017年6月12日 室堂閻魔台）



孵化直後の巣（北岳 2019年7月7日）

ともあります)、順調に行けば交尾、6月上旬ごろから産卵します。たいていの場合数日かけて6卵あまり産むことが多いですが、動物園で飼育すると20卵近くも産卵してしまいうこともあります(ニワトリと同じで産卵に交尾は必ずしも必要ありません)。オスは、その後、メスから離れて生活し11月末に越冬地に移動するころまでメスとは合流しません。ただし、雛を捕食者に食べられるなどして単独になってしまったメスと合流することは観察されていません。22日間の抱卵をへて、雛が6月下旬～7月上旬に孵化します。全個体が孵化すると親は巣を離れ、その後を雛がよちよちと追う姿が見られます。雛は孵化後の体重が18gしかなく、しかも親が給餌をしないので自力で親と同じ高山植物の葉や花、小さな昆虫を食べて育ちます。孵化後3～4日は、体内に残留している卵黄の栄養でなんとか暮らしていますが、卵黄が枯渇するといよいよ高山植物を消化しなくてはなりません。高山植物の葉を主食とするには、自分の消化酵素で分解できない繊維質など難消化性の炭水化物を分解する仕組みが必要です。ライチョウは、鳥としてはめずらしく1対の大きな盲腸を発達させています。盲腸の中には、大量の腸内細菌がすみついて高山植物の消化を助けています。ライチョウの生存に必須の腸内細菌は、雛が母鳥の盲腸糞(ライチョウはウサギなどと同じように、不消化物の塊である腸糞と腸内細菌で充満した粘性のある盲腸糞の2種類の糞を排泄します)を食糞する事によって伝達されます。我々の研究では、母鳥盲腸糞に対する雛の食糞が孵化後2～3日から14～18

日までの間に観察されました。ちょうど腹腔内の残留卵黄が消失する時期に食糞行動が開始されるのは、栄養を補う(盲腸糞には、腸内細菌が作った短鎖脂肪酸やアミノ酸、ビタミン類が含まれます)意味もあると考えられるほか、卵黄由来のイムノグロブリンが減少するときには腸内細菌の定着が容易になるからと考えられます。雛はその後順調に生育すると7月末には比較的長距離(数10m)を飛翔する事もできるようになり、オコジョやテンなどの捕食者から逃れることもできるようになります。上述のケージ保護法は、孵化後1ヶ月以内の雛の死亡率が高いことから発案された方法です。孵化後の雛は、梅雨時の風雨による体温低下をおこしやすいほか、運動機能が未発達なことからオコジョやテン、キツネ、ハヤブサやチョウゲンボウなどの捕食者に容易に捕獲されてしまいます。地域によってはニホンザルやカラスによる巣あらしの被害を受けやすいこともあって、この時期を人の手で保護する方法です。対症的な方法論ですが、2015年ごろからの経過の中で改良が進み、北岳の個体群が復活の兆しを見せるなど成果も得られています。

さて、雛が順調に生育すると、10月には成鳥と同じ400g程度の体重となり、親鳥から独立していきますが、この時期から翌年まではオスやメスの成鳥、同じ年生まれの子たちと群れを作って生活しています。11月末の連休あたりの室堂平の大谷や室堂乗越などで、10羽以上のライチョウが集まっているところに出くわします。彼らは、その後、越冬地にむかって下山していきます。ところで、ライチョウはメスが生まれた場所から離れた地点まで移動します。中には生まれた山岳を出て遠隔の山岳にたどり着くものもいます。白山に飛来していた単独メスは、ゲノムのハプロタイプ解析の結果、立山個体群由来と推定されたほか、2018年に木曾駒ヶ岳で確認された飛来メスは、乗鞍周辺の北ア個体群由来と考えられています。これらの個体は、冬の間移動していると推定されます。

動物園の取り組み

上述のように、希少種の保護のためには、生息地に特別な施設を作る場合が多く、施設維持の費用もかかることから3000種を超える絶滅危惧種をそれぞれカバーしていくことが資金的

に困難という問題がありました。またライチョウの場合は、高山地帯に施設を作っても通年での維持が困難です。そこで、動物園の参加を求め、生息域外保全のシステムを完成しようとしています。2015年、2016年の2回、梅雨の乗鞍岳でライチョウの巣を探し、有精卵を動物園に移送しました。その後、孵卵器内で孵化した雛を育てる試みを続けてきました。初期には頻繁に耐性菌による日和見感染症や栄養障害が疑われる死亡事故がおこったことから、我々の研究チームは、育成時の抗生物質常用をやめる方法の開発、ニワトリやウサギのエサの給与による栄養上の障害の改善を課題として取り組んできました。第一期の報告は環境省HPからご覧いただけます (https://www.data.go.jp/data/dataset/env_20200528_0255)。この研究の中で、抗生物質を置き換えることのできる野生ライチョウ由来腸内細菌製剤の開発に成功するとともに、ニワトリやウサギのエサを使った飼育から飼料の大幅な改善も進めることができました。現在は二期目の研究に取り組んでいるところですが、動物園と生息地（再導入地である中央アルプス）の間で個体の循環が試みられるため、孵卵器での人工孵化ではなく母鳥に育てさせる自然育雛技術の確立や感染症の管理が一層重要になってきました。

野外のライチョウは、全個体が腸管寄生性のコクシジウム原虫に感染しています。原虫の系統分類、毒性の強弱などについては未知でしたが、私たちの研究グループから *Eimeria raichoi* を新種として提案し承認されたほか、実験感染によって毒性を検査してきました。動物園では、この原虫の園内への持ち込みに対する抵抗感が強く、野生の個体を受け入れる際の障害でもあったためです。また糞便からこの寄生虫を除去する方法の開発に取り組みました。一方で、動物園では、つねに何かの動物が何かの病気に罹患しており、予防や治療のため、化学療法が使われますが、それによって薬剤耐性菌が蔓延することも同様に避けられない状況にあります。動物園のライチョウ飼育増殖事業では、上述のように、死亡事故が起こりますが、雛の死因はほとんどが感染症によるものでした。なかには、多剤耐性緑膿菌が検出される事例も経験したのですが、こうした日和見感染菌は、私たちの研究室であつかった野生のライチョウの糞



孵化当日、巣を離れたメスと雛（同上）

便からは、いまのところ検出歴がありません。動物園からは、野生個体が種々の病原体（おもに人獣共通感染症）を持っているかどうかの議論が提起されていたのですが、逆に、山から動物園におろして飼育された個体が、こうした細菌に感染した場合、その個体を生息地に復帰させることが妥当かどうかの検討も必要になってきます。

中央アルプスでの取り組み

中央アルプスでは、1960年代までライチョウが生息していました。しかし、1969年には目撃情報が途絶え絶滅したとされました。ところで、2018年に登山者が木曾駒ヶ岳で1羽のライチョウを撮影したため調査がなされ、このライチョウが巣作りと産卵もしていたことからメスであること、羽から抽出したゲノムDNA解析により乗鞍岳など北アルプス個体群から飛来したことが確認されました。この状況を受けて2019年に中央アルプスでの個体群復活がライチョウ保護増殖事業の課題とされました。動物園で飼育を開始していた乗鞍個体群の子孫と遺伝的に同一のグループであったことから、動物園の保険個体群を野生復帰させる場所として適切であったこと、絶滅危惧の指定要件の一つである生息地数を増やすことができると現状のIB類指定からII類に改善できることも大きな理由です。

2019年6月には、中央アルプスの飛来メスが産んだ無精卵（中アには、オスがいないため）



冬季下山前に作る群れ。クロウズゴの冬芽を食べている
(2016年11月2日室堂の大谷)

を乗鞍岳のメスが産んだ有精卵と取り替える作業を実施しました。ライチョウは、産卵後抱卵をはじめても、常にメス1羽で子育てをしますので、メスが餌を食べるために巣を離れるときがあります。このタイミングを狙って卵の入れ替えを実施しました。入れ替えた卵から無事ヒナが孵化したのですが、自然に任せたため残念ながら悪天候や捕食者のためにヒナは全滅してしまいました。このときにケージ保護の重要性があらためて認識されました。2020年6月には、動物園のメスが産卵した有精卵と取り替える作業を実施しました。取り替えは順調に進みましたが、ケージ保護を行うために孵化予定日に再調査したところ、調査前日に孵化していたことと、運悪くニホンザルに孵化開始直後の巣を襲われて、孵化した雛が巣の外で全滅したほか、孵化前の卵も巣の外に投げ捨てられていたため孵化できずに死んでいることが発覚したのです。この年には、卵の入れ替えと同時に、乗鞍岳でもケージ保護を実施し、メス親と雛3組を中央アルプスに設置したケージに移送し、現地順化後、放鳥しました。この時点で中央アルプスには、成メス4羽（うち1羽は、移送前中アにいた個体）とヒナ16羽になっています。

今年4月以降、中アでの調査を繰り返したところ、18羽が確認できました。ほぼ全員がうまく越冬し、春に再び中アの主稜線に戻ってきたこととなります。

その後、確認できた縄張り数は8箇所、一部オス1羽に対してメス2羽が「つがい」を形成していました。このうちから産卵と孵化を確認して7月当初に5組をケージに収容しま

した。この時点で、中アのライチョウは、ヒナをふくめると50羽を超える数になっていました。ケージ保護の親子から2組を2箇所の動物園に移送しました。来年には、動物園で繁殖させたライチョウを中アに戻すなどして、最終的に100羽を超える個体群の規模にする計画がすすめられています。

高山レフュージア環境の保全

日本の高山地帯は、氷河期の生き残りの動植物が逃げ込んだレフュージアと考えられます。ニホンライチョウは、氷河期終了後の環境変化に適応できず、高山に取り残された動物です。その意味では、地球温暖化が原因で滅びる運命なのかもしれません。「このような保全事業は必要ない」という意見も耳にすることがあります。たしかにイネ科草本の進出による高山植物の圧迫は気候変動の結果、自然の営みかも知れません。いっぽうで、ニホンジカの標高3000m付近への進出と高山植物への食害、テンの山小屋での越冬、キツネの進出などは人間活動の直接の影響を否定できません。もともと高山に住むオコジョは、体もちいさくライチョウの成鳥を捕ることは困難です。孵化後のヒナの消耗は、ニホンライチョウの生態の中ではある程度織り込み済みの事象ですが、同種亜種のスバルバルライチョウのように産卵数を増やすのではなく、親になってからの比較的長寿命（12-13歳）と毎年の繁殖で個体数を維持してきたと考えられています。一方、親鳥を捕らえる力のあるテンやキツネのライチョウ生息域への進出は、これまで生残率の高かった成鳥の寿命を大幅に減少させる効果があり、それに加えてシカによる高山植物の食害は、北岳などいくつかの地域でライチョウが急速に減少してきた有力な原因とされています。現在のライチョウの保全事業は、高山レフュージア環境の表徴種としての保全であって、急速な地域個体数減少への緊急的な対応であると思っています。したがって、この緊急的な保全事業が終了した後も、ライチョウの個体数が維持されるような環境づくりを進行させる時期に来ていると思います。そのためには、高山環境を産業利用するセクター、そのサービスの利用者の理解増進が必要です。引き続き、ご支援をいただけるとありがたいです。

チョゴリザ登山隊のカメラマン・潮田三代治氏を悼む

芳賀孝郎

潮田三代治氏は2021年9月21日104歳の人生を全うしてお亡くなりになった。チョゴリザ隊員一同心よりお悔やみ申し上げる。

奥様がお亡くなりになった92歳から12年間一人で生き抜いたことは素晴らしい。支那事変から太平洋戦争の7年間カメラマンとして従軍したこの貴重な体験により、強い意志と慎重な行動で長生きされたと思う。

氏は、1958年京都大学学士山岳会チョゴリザ登山隊にカメラマンとして同行された。若い平井、高村、岩坪、芳賀隊員は潮田氏の戦争体験の話に魅かれ、ミッドウェー海戦、ガダルカナル戦線、インパール作戦、レイテ島戦線などの激戦地での話に興奮したことを思い出す。潮田氏は、カメラを構えている時は弾丸がカメラをそれて行くとの強い信念の持ち主であった。

チョゴリザ登山中もカメラを持った潮田氏は、危険な場所も恐れず行動するので、加藤副隊長は潮田氏がカメラを持った時には隊員は注意をして見はるように云われた。登山経験のない潮田氏であったが、激戦地を生き抜いた強い精神と経験、更に高い職業意識を持ってチョゴリザ(7654m)の初登頂の登山記録を撮影した。

2018年12月の日本山岳会年次晩餐会で、チョゴリザ登頂60周年記念の講演と「花嫁の峰 チョゴリザ」の映画会が皇太子殿下(当時)をお迎えして開催された。登頂者平井隊員の講演、そして中島、平井、高村、岩坪、芳賀の各隊員が紹介された。晩餐会後には皇太子殿下と懇談の機会が与えられた。皇太子殿下は60年前のチョゴリザ登頂の映画に感動し、素晴らしい映像であったとお褒めの言葉があった。潮田カメラマンが聞いたらさぞ喜んだことと思った。

チョゴリザ登山後も平井ポコさん、高村デルファさんは潮田氏とは時々連絡を取っていた。私は平井氏の知らせで、100歳になられた潮田氏へお祝いの電話をしたことがあった。昔と変わらずの声で懐かしく感じた。

チョゴリザ登頂50周年の翌年・2009年ポコさんとデルファさんは東京・板橋の潮田宅を訪

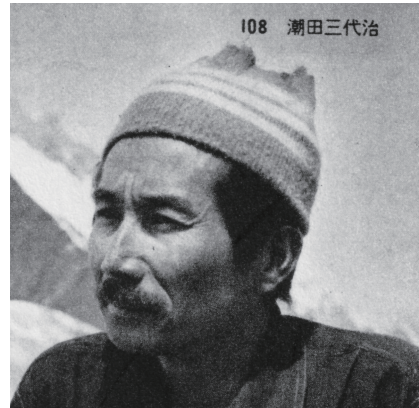


写真1 潮田三代治氏 『チョゴリザ』朝日新聞社(1959)より

ねていた。その目的はチョゴリザ登頂映画撮影の苦労話を聴くためであった。その関係で今回の訃報が高村宅へ届いた。その訃報は岩坪氏経由で私は知った。

潮田氏にはお二人のお嬢さんがいらっしゃる。長女は山形市にお住みになり、次女は東京近郊にお住みである。私は長女の方へお悔やみの手紙を書いた。

潮田氏の戦争体験は誠に貴重であり、その資料をお持ちですかと尋ねた。運よく潮田氏が92歳の時に著された「私の戦争体験記」をいただいた。潮田氏の経歴とその本の内容は次の通りである。

大戦中期まで

1917年(大正6年)5月22日生

1938年(昭和13年)11月 ニュースカメラマンとして同盟通信社へ入社。同年12月上海へ、その後北支、中支、南支で従軍カメラマンとして陸軍山砲部隊などで活動した。そこで中国軍のチェコスロバキア製機関銃の攻撃に時々遭遇した。

1940年(昭和15年)3年間の中国戦線から帰国した。11月紀元2600年式典が皇居前広場で開催された。その式典撮影カメラマンとして



写真2 ベースキャンプのチョゴリザ登山隊、最前に座るのが潮田氏、(1958年)

選抜された。その年、大毎、朝日、読売、同盟のニュースカメラ班は一つに統一されて日本映画社となり、潮田氏は日映社員となった。

1941年(昭和16年)12月8日 太平洋戦争勃発

1942年(昭和17年)1月 ペナンの潜水艦基地に派遣された。この基地にはイ60号からイ64号までの5隻が配属されていた。当時日本は75隻の潜水艦を持っていた。

山本五十六連合艦隊司令長官が視察に来られた。その後、山本長官は航空機での移動中に暗号を読まれアメリカ軍に撃墜された。基地では往復3ヶ月を要してドイツから生還した潜水艦にも出会った。

その後サバン島の海軍航空隊の報道班へ移動した。マレー半島の西端にあるインド洋に面した島であった。サバン島では中型攻撃機が毎日8機でインド洋の敵艦を捜索するのが日課であった。もし敵艦隊を発見したら直ちに敵艦隊の編成を基地に打電する。発見した機は、当然敵艦隊の戦闘機に撃ち落とされる運命であった。毎日敵艦隊を見つけないよう祈っていた。

1943年(昭和18年)航空母艦「瑞鶴」に乗る。ミッドウェー海戦(1942年)では、海軍の作戦失敗でアメリカ軍に迎え撃たれ、壮烈な戦いの末に敗れた。日本海軍には9隻の航空母艦があったが、この海戦で「赤城」「加賀」など主力空母4隻が撃沈された。そのため、主力空母の中でこのころ無傷だったのは「瑞鶴」1隻だけであった。瑞鶴に乗艦した報道班員は潮田1人であった。記事を書き、写真を撮り、映画を撮り、一人三役の仕事であった。

「瑞鶴」は排水量3万トン、飛行甲板300m、戦闘機、艦上攻撃機、艦上爆撃機各30数機合計100機が搭載されていた。乗組員は2500名。

ガダルカナル島の撤収作戦(1943年)

この時、潮田は空母「隼鷹」に乗艦していた。その空母は商船・檀原丸を改装したものであった。昭和17年5月竣工で48機の飛行機を搭載していた。

当初ガダルカナル島には九州の124連隊が守備についていた。アメリカ軍が制空権と制海権を持っているため、数千名の将兵には補給が出来ず殆どの兵隊は餓死した。生き残った200余名の将兵を救出する作戦であった。夜中駆逐艦で海岸に接近して救出した。その兵士を「隼鷹」に乗船させた。痩せていて兵士は目だけが異常に輝いていたと記されている。

インパール作戦

1944年(昭和19年)1月、アンダマン島に敵前上陸したある日、日映本社から指令が飛び込んできた。陸軍最大の失敗作戦と言われたインパール作戦へ参加せよとの命令であった。

インパール作戦には31師団のほか15師団33師団その他数師団の編成部隊10万人以上が投入された。メイミョウからインパール迄は400kmあり、1944年4月作戦が開始された。

ジャングルの中の行軍、補給部隊はことごとく英インド軍に攻撃された。雨季のジャングルの中で10万名余の将兵は全くの陸の孤島に取り残された。潮田は中国戦線で先輩から教えられた「死ぬまで離すな」と言われた岩塩をなめながら歩き続けた。これ以上に部隊と共に行動しても意味がないと判断した。同盟通信の野口記者と共に師団参謀にメイミョウまで後退したい旨の相談をした。参謀は即座に「あなた方は死んではいけない。生きてこの状況を必ず伝えて欲しい」と手を握った。

途中のジャングルの中は惨憺たるものであった。野戦病院は医師も看護婦も見当たらず、死体は埋めることもなくいたるところに放置されていた。インパール作戦の記録フィルムは師団司令部を経て東京へ発送した。300フィートのフィルムは東京に着いていた。この作戦で、ビルマ人、インド人含めて16万4千人が犠牲になった。



写真3 ベースキャンプを訪問したイタリア隊（G IV 初登頂）とともに。最前列右端が潮田氏（1958年8月）

1944年11月レイテ島に逆上陸

一度フィリピンから撤退したマッカーサー將軍が真珠湾第24師団を率いて、再びフィリピン・レイテ島東岸に上陸したのは10月17日であった。このマッカーサーを迎え撃つため、満州での陸軍最精鋭部隊の第一師団を急遽レイテ島に逆上陸させることになった。

潮田はインパール作戦からようやくマニラに帰った時、日映本社からマニラから第一師団に従軍するように指令を受けた。第一師団の将兵と13名の報道班員は4隻の貨物船に乗船した。海軍の艦艇に守られた船団は、昼間はバラバラになり島影に隠れながら、夜だけ航行し爆撃を受けずに11月1日夜明け前、レイテ島オルモック湾入口に到着した。オルモック湾は14日前アメリカ軍の上陸した太平洋側山脈を挟んだ反対側である。

夜明け前に上陸が開始された。この日は風が強く、海は荒れ、上陸は困難を極めた。舟艇に乗り移れない兵士は次々と海へと落ち悲惨であった。この上陸作戦のフィルム原稿500フィートは金華丸の船長に託され、内地でニュース映画として公開された。

上陸した将兵は、一切の補給がなくなり、フィルムの補給もなくなった。

アメリカ軍の攻撃は日夜激しくなり、砲弾は降り続いた。逃げるにも逃げ場がなくなり袋のネズミとなった。こんなバカバカしい戦争をなくするには地球が一つになることしかないと潮田は考えた。

13名の報道班員の内3名はインパール作戦とニューギニア戦線の経験者であった。3名は

第一師団参謀からマニラ司令部行き命令書を書いてもらった。

3人が海岸に向かう山道には、日本兵の腐敗した死体がゴロゴロとあり、まだ少し動ける人もいた。この辺り一帯は負傷者と死体が群をなし、まさにこの世の地獄であった。

装甲艇でセブ島に渡り、そこから戦闘機に乗りミンダナオ島に到着した。

マニラに着いたのは、レイテ島を出発してから10日目であった。その当時マニラはアメリカ軍が迫っているのが騒然としていた。日本人はマニラからバギオへの脱出中であった。途中で度々アメリカ軍機の攻撃を受けた。隊はバラバラになり、潮田は単独で歩き出し、ツゲガラオ飛行場を目指した。そこで運よく双発高等練習機に乗ることが出来た。台湾の高雄に無事到着した。その後台北でしばらく休養して日本行の飛行機を待った。

東京へ帰る

1945年（昭和20年）3月1日インパール作戦とレイテ島戦争の地獄の長い道のりを経て東京へ帰った。当時若いカメラマンは各地の戦線を点々と移動させられ、使い捨てカメラマンであった。日映社には52名のカメラマンがいたが、数名のみが生き残った。潮田はその一人であった。

3月30日、潮田は待っていてくれた城直弥生さんと結婚した。千葉の白浜へ新婚旅行に行った。その後世田谷代田2丁目では新婚生活が始まった。

4月にNHKから子供の時間に戦地の様子のお話をしてほしいと依頼があった。放送する前に参謀本部の許可が必要であった。日本はもう勝ち目がないので、都会に住んでいる方々は早く疎開するようにとの原稿は全て赤線が引かれていた。仕方なく、戦地も内地と同様に食料が不足している、苦しい状況で兵隊さんは戦っている、と話をした。

隣組からも戦地の話を聞きたいとの要望があった。戦地の兵隊さんたちは弾薬も食料も補給がなく、このような状況下で戦争している。この戦は勝ち目はない、と話をした。その班長から言葉を慎むよう注意された。

陸軍参謀との会談

日映を通して陸軍参謀本部からフィリピンの戦況について、最近現地から帰った報道班員から「見て来た戦況」を聞きたいとの依頼を受けた。

千載一遇のチャンスが来たとはばかりに、勇気をもって3人の参謀へ、ガダルカナル島、インパール作戦、レイテ島のジャングルで悔しながら餓死した数十万人の将兵を代表して参謀たちにぶちまけた。更に最前線から帰ってみると、国民はアメリカ軍が上陸した時は竹やりで立ち向かうよう軍から通達が出されているという。現況では少しでも犠牲を少なくするため安全な場所へ避難するようお願いし、これで戦局は持ちこたえられるかを問うた。3人の参謀はうつむいたままで、一言も発しなかった。

1945年8月15日 終戦を迎えて

潮田は日中戦争に続いて太平洋戦争と7年間陸軍と海軍に従軍し、敗戦した。各々の軍の欠点を述べている。

陸軍について

陸軍では食料の調達現地調達が基本であり、中国本土では成功した。しかしジャングルの中での戦い、ガダルカナル島、インパール作戦、レイテ島では見事に失敗した。アメリカ軍は制空権と制海権を握り「兵糧攻め」戦法でインパール作戦、更にフィリピン作戦とで数十万の将兵が餓死した。インパール作戦でも、レイテ島でも、日本軍の空からの補給を一度も受けたことがなかった。

海軍について

海上での最後の勝敗を決するのは戦艦であり、戦艦を主とする艦隊同志の決戦は砲術で決する、と砲術科出身の面々が固く信じている。一方航空部隊は着々と充実していたがトップが若く、古参の砲術科に太刀打ち出来なかった。

ミッドウェーの海戦では数隻の航空母艦を撃沈された。残りの主力空母の中で潮田が乗った瑞鶴のみが無傷であった。その後の空母は商船を改装したもので、一発の魚雷で沈没した。その後急いで建造された「大和」と「武蔵」は超巨艦であった。この戦艦一隻の建造費で100機搭載できる空母が3隻も出来る費用であっ

た。航空部隊の連中はどうして空母を造らないか口惜しがっていた。戦争の敗因は陸軍も海軍も現場の戦争を無視した参謀の作戦が失敗であった。

戦後の活躍について

日映新社の社員となり、帝銀事件、松川事件などのニュース映画の報道で活躍

1958年 チョゴリザ登山隊にカメラマンとして参加、活躍

1964年 東京オリンピックの報道カメラマンとして活躍

1970年 日映新社退職

1972年 札幌オリンピックの報道カメラマンとして活躍

その後15年間専門学校多摩学園の映画学科(現在の多摩美術大学)で教鞭をとり、ドキュメンタリー映画の撮影、製作を指導した。

2021年9月21日逝去 享年104歳

私はチョゴリザ登山中に断片的に中国戦線、ミッドウェー海戦、インパール作戦、レイテ島戦線の話聞いていた。今回潮田氏の「私の戦争体験記」を読んで、太平洋戦争の年代別戦争の歴史を知ることが出来た。

各戦線から逃れた度に潮田は、戦争のない平和な地球にしたいと叫んでいた。地球が一つになり、言葉が統一され、貨幣も統一される地球になってほしいと記され、戦後も戦争が世界各地で起きていることを嘆いていた

潮田氏は誠に運の強い人である。インパール作戦でも、レイテ島の戦線でも勇気をもって脱出を決断し、見事に成功した。その行動を称賛し、心より喝采を送りたい。

日本人でこの太平洋戦争の各激戦地で報道カメラマンとして従軍し、生き抜いた人は潮田氏以外に実在したのだろうか。5千フィート余の戦争記録フィルムとそれに関する資料は全て焼失したが、「花嫁の峰 チョゴリザ」の映画は後世に残るでしょう。

ご冥福をお祈りする。

合掌

第 48 回雲南懇話会の講演概要

山岸久雄

もう既に2年半も前になりますが、2019年4月13日(土)、JICA国際会議場(東京・市ヶ谷)で開催された第48回雲南懇話会の講演概要を紹介させていただきます。

1. 東ブータンの土着信仰 — シャショッパの事例から —

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程(講演当時)
渡邊 美穂子

ヒマラヤ山脈東端に位置するブータンは敬虔なチベット仏教徒が多いこと、国民総幸福(Gross National Happiness)政策により、国民の幸福度が高いことで知られており、約80万人が暮らしている。渡邊さんは、首都から車で二日かかる東ブータンの人々の土着信仰を調査している。ブータンには約400もの土着神がいるが、東ブータンのタシガン県一帯ではアマ・ジョモという女神が大きな影響力をもっている。この地域には公用語ゾンカとは異なるシャショッパという言語を話す人々がおり、シャショッパ(「東方の人」の意)と呼ばれる。その中でも、メラ、サクテン地域のプロッパという部族はアマ・ジョモとともにチベットからやってきたという伝承を持つ。そして、そのアマ・ジョモ信仰は、メラ、サクテンの麓の村々にも根づいている。シャショッパは文字の無い言語だが、彼らはアマ・ジョモ信仰の儀式やストーリーを親から子、子から孫へと代々語り伝えてきた。渡邊さんは、それらを彼らから直接聞き取り、また地域の儀式に参加して調査を行ってきた。

調査地の一つであるラディ地域ではラカン(仏教寺院)の中に、土着神を祀るゲンカンという施設が併設されており、そこにはアマ・ジョモを中心に、メメ・ダンリン(アマ・ジョモの夫、あるいは弟)や土地の神々が描かれている。アマ・ジョモにまつわる伝承には、土着神がアマ・ジョモと戦い、最後には手を組むといったストーリーが豊富に遺されており、アマ・ジョ

モ信仰が在来の土着信仰と融合しつつ、今日まで守られてきた様子が伺える。

もう一つの調査地であるカリン地域では、仏教寺院ボカラカンの中に建てられたゲンカンにアマ・ジョモとメメ・ダンリンが祀られており、毎年5月末にジョモ・セカという儀式が、メメ・ダンリンの直系子孫といわれるメメ・ドルジ氏により執り行われてきた。その1週間後には、同地のダンリン湖でダンリン・セカという儀式が行われる。このように、カリン地域では、儀式を実践することにより、アマ・ジョモ信仰を伝えるという特徴がみられる。アマ・ジョモ伝承に詳しいのは年長者であるが、彼らはシャショッパしか話さない場合が多い。そのため渡邊さんは、バラエティーに富むアマ・ジョモ信仰のストーリーを、彼ら自身の言語、シャショッパで記録しておきたいと考えている。

2. 私のフィールドノート — 岩木山からヒマラヤ・チベット、白神山地、津軽の山々 —

記録作家、津軽百年の森づくり代表、
明治大学山岳部炉辺会
根深 誠

根深さんは1970年代よりヒマラヤ遠征を多数行い、1986年ゴッラゾム(5600m級の無名峰、廣島三朗氏の命名。パキスタン)、1988年シャハーン・ドク(6194m、パキスタン)等、未踏峰6座に初登頂している。1973~74年の冬、アンナプルナとダウラギリ山群に挟まれたトゥクチェ村に滞在した根深さんは、住民から「エカイ・カワグチ先生」の話聞いた。言うまでもなく、明治時代に仏教の原典を求め、当時禁断の地であったチベットにヒマラヤの峠を越えて潜入した河口慧海のことだ。根深さんは北隣りのジョムソン村に行き、その先のムスタン地方(当時、外国人は入域禁止)の岩石砂漠の山並みを眺めながら、慧海が越えた峠は一体どこなのか?その経路を、いつか自分で調査してみたい、と思いを馳せた。本講演で根深さんは、自らのライフワークとなったその調査の概要を

淡々と語られたが、配布資料（『岳人』2019年2月号、空白の地図―ネパールとチベットの国境をゆく―）には、調査の詳しい経緯と根深さんの熱い思いが語られている。

ムスタン地方は1991年秋、外国人に開放された。翌1992年の夏、さっそく同地を取材旅行で訪れた根深さんに、ネパール政府は特段の配慮をもって、当時未開放であったトルボ地方入城の許可を与えた。根深さんはかつてのヒマラヤ登山で苦楽をともにした1人のシェルパを伴い、大峡谷を通り抜け、5km級の峠をいくつも越え、トルボ地方奥のチベット国境に向かった。国境には、西からクンラ、マンゲンラ、エナンラ、マリユンラという4つの峠があり、そのどれかを慧海が越えたと思われた。慧海の「チベット旅行記」に記載された峠のチベット側の2つの池の形（長方形と円）と、同地に伝わる神話との整合性から、この時はマリユンラを越えたと推定したが、マリユンラから望見した池の形はよくわからず、一抹の不安が残った。この調査の様子は「遥かなるチベット」（山と溪谷社、1994年刊）にまとめられ、第4回JTB紀行文学大賞を受賞している。

その後、2004年に慧海の姪である宮田恵美さんから、慧海が当時書いた日記のコピーを入手することができた。さらにネパールが近年作成した地形図やランドサット衛星写真、GPS端末などを用意し、2005年と2006年、根深さんは再びチベット国境に向かった。慧海の日記の峠越えにあたる部分は黒く塗り潰され、判読不能であったが、その前後の記述は参考になった。衛星写真による池の形、峠に至る道の住民からの聞き取り、現地調査を考え併せると、慧海はマンゲンラを越えたとするのが最も合理的と根深さんは結論づけた。

この調査に先立つ2002～2004年、根深さんはトルボのツェルカ村に3年がかりで鉄橋を架ける工事を支援した。その経緯は根深さんの著書『ヒマラヤにかける橋』（みすず書房、2007年刊）にまとめられているが、本講演では、この工事の様子を映像で詳しく紹介された。根深さんと地元住民との交流の深さに心を打たれた。（後日談：根深さんは2019年6月～8月に慧海の越境ルートの再調査を行い、現段階の推理としてムィコーラからラルラ（現地名：ゴップカルラ）を越え、クンツォ～ネーユ～白

巖窟に至るルートを想定されている。）

3. 「穴」と「箱」の来歴：カトマンズ盆地の道ばたから

関西学院大学社会学部教授、山岳部長、
AACK 古川 彰

古川さんは社会史と自然史をつなぐエスノグラフィ（行動観察調査）、すなわち人と自然の関わりや、その変遷過程を、人の暮らしの側から分析する調査を行ってきた。本講演では、カトマンズ盆地に4世紀頃から暮らすともいわれる先住民「ネワール」の王都であったパタン市の旧市街（1979年に世界文化遺産に登録）の路傍に点在する、ジャルンと呼ばれる石の「箱」と、ガーと呼ばれる「穴」の由来と現状が語られた。

ジャルンは広場の道端や街角に建てられた石造りの給水所であり、朝一番に井戸から汲んだ水を入れ、旅人らの喉を潤してきた。その建造の歴史は古く、5、6世紀まで遡る。ジャルンは街の名士が亡くなったり、伝染病などの災厄が起きたあと、コミュニティや遺族、篤志家が記念として建立したもので、20世紀半ばまで作られてきた。2005年の調査時にはパタン旧市街に106基のジャルンがあり、その内、毎日給水されているのは5基であった。ジャルンの数は年々減少しており、2015年には96基、2017年には73基となった。

一方、「穴」（ガー）には、いろいろな種類があり、それぞれ固有の名前（ブンガー、サガー、ナウガー、デョガー、チャサ、カラン・・・）が付いており、街区の辻ごとに配置されている。たとえばチャサと呼ばれる穴には、生まれた時の後産や通過儀礼の儀式で使われた供物、死者が使っていた布団や衣類などが入れられてきた。ガーは本来、深い穴であったが、現在では浅いものになっており、単に場所を示す印だけが残されているものもある。ガーがいつ頃から使われ始めたのか明らかではないが、今でも蒲団や後産の壺などを見ることがあり、実際に使用されている。本講演の配布資料には、出産時や死亡時にガーに何を、どのように置くのか、当事者であった人たちへのインタビューが載っている。また、ガーに置かれたものを片付けるカーストの人へのインタビューも載っている。

長い間、ネワール伝統文化の一端を形作ってきた「箱」や「穴」であるが、近年、自動車の増加に伴う道路整備、世界遺産にふさわしい街並みの整備、衛生環境の向上要請、民主化によるカーストの役割の終焉など、様々な理由により、その姿が街角から、そして人びとの記憶から消え去ろうとしている。

4. 映像・トークショー：生きるって、なに？ —自分らしく生きて、自分を好きになろう！— 地球の広報・旅人・エッセイスト たかのてるこ

たかのさんは「世界中の人と仲良くなれる！」と信じ、7大陸・70ヶ国を駆ける旅人である。代表作『ガンジス河でバタフライ』はドラマ化もされ、著書多数。映画会社に勤めた後、独立し、世界の魅力を伝える“地球の広報”として、全国での講演、メディア出演など幅広く活動。そして、AACKの高野昭吾会員のお嬢さんである。

たかのさんが登壇し、軽妙に語り始めると会場の雰囲気は一変した。彼女は学生時代、人と比べて自分をダメな人間だと思い、“自分イジメ”をしていたが、20歳の時、勇気を振り絞って海外ひとり旅へ。今までの人生では、学校でも職場でも上下関係があったのに、旅先での出会いでは、どんな人とも年齢や出身、肩書きなど関係なく、ありのままの、等身大の、生身の人間として出会うことができた。そして、日本の常識＝世界の常識ではないことを知り、初めて「自分の欠点は全部、長所なんだ」と自分自身を受け入れることができるようになった。チベット文化圏を旅したときは、仏教徒たちが「生きとし生けるもの」の幸せを祈っているこ

とに衝撃を受けた。「自分の願い事をする必要はないよ。世界の平和には、君のことも含まれてるんだ。世界が平和になれば、君も自動的に幸せになるのに、どうして自分ひとりだけ幸せになろうとするんだい？ 君の幸せと世界中の人の幸せは繋がっているんだよ」と言われ、目からウロコがぼたぼた落ちた。私がひとりでは幸せを感じることはできないように、他の人だって自分ひとりでは幸せを感じることはできない。私の幸せは、他の人の幸せとも密接に繋がってる！と腹の底から思った、といった体験を語った（紀行本『ドライ・ラマに恋して』のエピソードより）。

独立後、大学でも教えることになった彼女は、教え子から「生きる意味がわからない」と悩みを打ち明けられた。前向きな心が湧くような文章をと思い、彼に送った文章を元に、写真絵本『生きるって、なに？』を500円で自費出版。講演後の販売会で、かなり多くの人がこの本を手にし、私もその一人であるが、本を読んでたかのさんの思いをより深く理解できた。「生きるって、なに？」という、幼い子どもが抱くような素朴な問いかけに、「それは、自分をまるごと愛すること」「それは？」「自分を大事にすること」と問答のように続いていく。「生きている」ということは、人とつながり、世界とつながっていることであり、すべての人類の歩み、すべての自然、すべての源である宇宙ともつながっているということが、彼女が撮影した世界中の素敵な笑顔写真とともに伝わってくる。（後日談：その後、写真絵本シリーズは、第2弾『逃げろ 生きろ 生きのびろ！』、第3弾『笑って、バイバイ！』を含め、累計16万部超のヒットに。書店やアマゾンでも購入可）

大雪の高田、その後

横山宏太郎

Newsletter96号では、「大雪の高田から」と題して、さきの冬、つまり2020-2021年の冬（2021Wとも書くことがある）の大雪について報告しました。12月からの積雪がたびたびの降雪で増加し、ついに積雪249cmに達する記録的な豪雪となり、交通・物流をはじめとして

大きな影響が出ました。しかし幸いなことに1月半ば以降はそれほど大量の降雪はなく、2月14日現在の積雪深は115cmまで減りました。ここまでが前回の報告ですが、その後について遅ればせながら報告します。

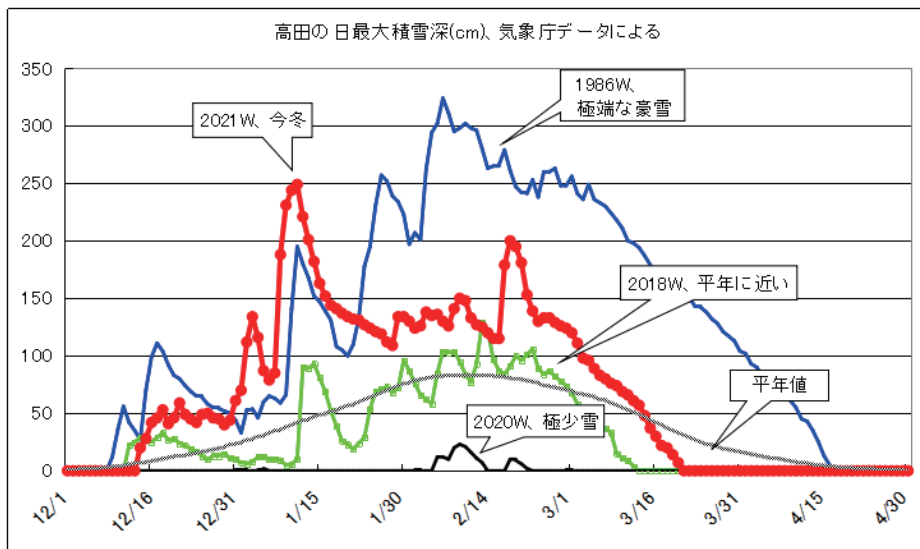


図1 高田の日最大積雪深の推移、気象庁データによる。
今冬（2021W）を1986Wと比較すると、1月下旬から2月上旬の降雪が少なかった。



図2 大雪時と無雪期の市街。上越市・高田地区



1月半ば、積雪が2m以上のころ、豪雪下の生活に疲れた住民は、さらに降雪が続けば大変なことになると心配していました。1月から2月にかけてはいちばん気温の低い時期ですから降雪の続くのがふつうで、過去の記録的豪雪ではその結果として3mを超えるような積雪になったわけです。図1でもその様子は見て取れます（1986W）。

しかし、前述の通り、たいへん幸いにも約1か月にわたってそれほど大量の降雪はなく、2月14日現在の積雪深は115cmまで減りました。気象庁の予報では、そこから1か月は気温高めの確率が高くなっていましたので、やれやれと思っていたのですが、その直後、2月16日か

らまた降雪が始まり、3日間で97cmの降雪深を記録しました。その結果、積雪深は、200cmに達しました。

もちろんこれでも市内の交通などで混乱はありましたが、比較的早く収束しました。それは、1月の大雪の後、約1か月の長い期間にわたりまとまった降雪がなく、道路や家屋周辺の雪が片付いていたことによると言えるでしょう。また、それ以後はまとまった降雪はなく、3月20日、比較的早く消雪となりました。

図1は、ひと冬の積雪深の推移を示したグラフです。データはすべて気象庁データによります。さきの冬（今冬としています）、2021Wと、



図3 積雪を比較した地点。左図は地理院地図 (maps.gsi.go.jp) に加筆、右図は www.freemap.jp よりダウンロードし改変

比較のために極端な豪雪 (1986W)、極端な少雪 (2020W)、平年値、平年に近い冬 (2018W) を示しています。1986Wと2021Wを比べると、上に述べた1月から2月にかけての経緯の違いが分かると思います。また、2020Wと2021Wを比べると、年々の変動の大きさがよくわかります。

図2は、前報の大雪時の写真と、雪のない状態の写真とを並べてみたものです。雪は融けてしまえばこのように無くなりますが、いずれは融けると分かっているにもかかわらずにもいきません。大雪ともなれば、除雪の負担は、自治体にも、住民にも大きなものになります。

ここまで高田のお話をしてきましたが、周辺はどうだったのでしょうか。気象庁アメダスのデータによりこの冬の状況を示します。

表1に示すデータは、図3の5地点です。「高田」は平野部で、「関山」は妙高方面の山地に

向かって標高が高まって行く、山地の入り口とでもいうような地域、ほかの3地点はいわゆる「中山間地域」です。それぞれこの冬の積雪深を年最深積雪平年値と対比させてみると、関山と津南ではほぼ平年並みかそれ以下なのに対し、ほかの3地点では平年よりかなり多く、特に平野部の高田で平年の2.5倍の積雪になったことがわかります。山地は普通の雪程度、中山間地と平地は大雪という傾向です。山雪パターンが少なかったとも言えますし、雪雲が平野部から中山間方面に頻りに流れ込んだとも言えます。私などが願うところの理想的な雪、平野に少なく山に充分という降積雪のパターンとは真逆になってしまいました。

すでに次の冬の天気予報も発表されています。寒候期 (12月～2月) 予報では、新潟県についてみると、気温は低い確率が、降雪量が多い確率が、それぞれ高くなっています。また、大雪になりやすいというラニーニャ現象が、秋

表1 新潟県南部の積雪比較 データは気象庁による

地点名	標高(m)	最深積雪(cm)			消雪日
		年最深積雪 平年値	2021年		
高田	13	96	249	200	3月20日
関山	350	204	218	176	3月21日
安塚	126	174	307	303	4月8日
十日町	170	217	301	302	4月10日
津南	452	271	272	289	4月13日

から冬にかけて発生する可能性が高いとも言われており、雪国の住民としては例年以上に心配

しながら冬支度をする事になりそうです。

事務局便り

12月18日にAACKの共催で京都大学百年時計台記念館にて対面で雲南懇話会が開催されます。今までの2021年のAACK主催あるいは共催の事業はすべてウェブ方式でしたので、これが2021年では初めての対面形式とな

ります。これが終了しますと2週間後には新年を迎えますが、2022年は、このままコロナ感染も収まり対面で皆様とお会いできる年となることを願っています。(AACK事務局)

会員動向

会員異動

東 卓夫 勤務先変更
岩井國臣 自宅住所変更
栗本俊和 メールアドレス修正
田中達吉 勤務先削除

能田 成 メールアドレス変更
松沢哲郎 勤務先削除
松本保博 自宅住所変更
吉村千春 勤務先電話番号変更
和田泰三 勤務先変更

編集後記

AACK 創立90周年ですが、編集人の準備不足からNewsletterで特集を組むまでに至らず、幸島司郎会長にメッセージをお願いしました。

斎藤清明さんは、三高山岳部報告第一号を紹介してくださいました。前号で紹介されたAACK会報第一号とあわせ、記録をかたちにして残すことの意義をあらためて感じました。

牛田一成さんには、ライチョウ保全活動での活躍を書きいただきました。牛田さんの腸内細菌研究は、ゴリラの森からヒマラヤの水河、また太古まで時空を超えて広がっているようです。また興味深いお話を期待しています。

芳賀孝郎さんからチョゴリザのカメラマン、潮田三代治さんの追悼文をいただきました。まさに壮烈な104年の生涯、謹んで潮田さんのご冥福をお祈りいたします。

雲南懇話会の報告は、取りまとめの山岸さんのご苦勞は大きいでしょうが、貴重な情報です。

著者の皆様ありがとうございました。会員の皆様にはご寄稿・ご協力よろしくお願ひいたします。

横山宏太郎

発行日 2021年12月15日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町1-8
株土倉事務所